

5) 住吉神社の祭礼

5) -1 はじめに

住吉神社は、大分市街地北側に位置し、正徳2年(1712)『府内藩記録』によれば西応寺に鎮座していたが延宝5年(1677)に現在の場所(大分市住吉町)に移転した。

『大友興廢記』(寛永12年(1635))によれば神輿を船に乗せてその上で舞を行っていたとある。大友氏の追放と共に途絶えたが、江戸時代に再興し正徳2年(1712)『府内藩記録』によると「えびす人形」や「大友真鳥人形」の飾りがあり、菓子などを売る「仮屋」が31軒出店され人出は1万人を超えたという。



『御城下絵図』に描かれた住吉神社

5) -2 建造物

住吉神社

住吉神社境内にある石碑によると、昭和2年(1927)の改築である。拝殿は入母屋造銅板葺で、唐破風の向拝がつく。本殿は一間社春日造銅板葺で、部材の状態から拝殿と同時期の改築または建築と推定される。



住吉神社拝殿

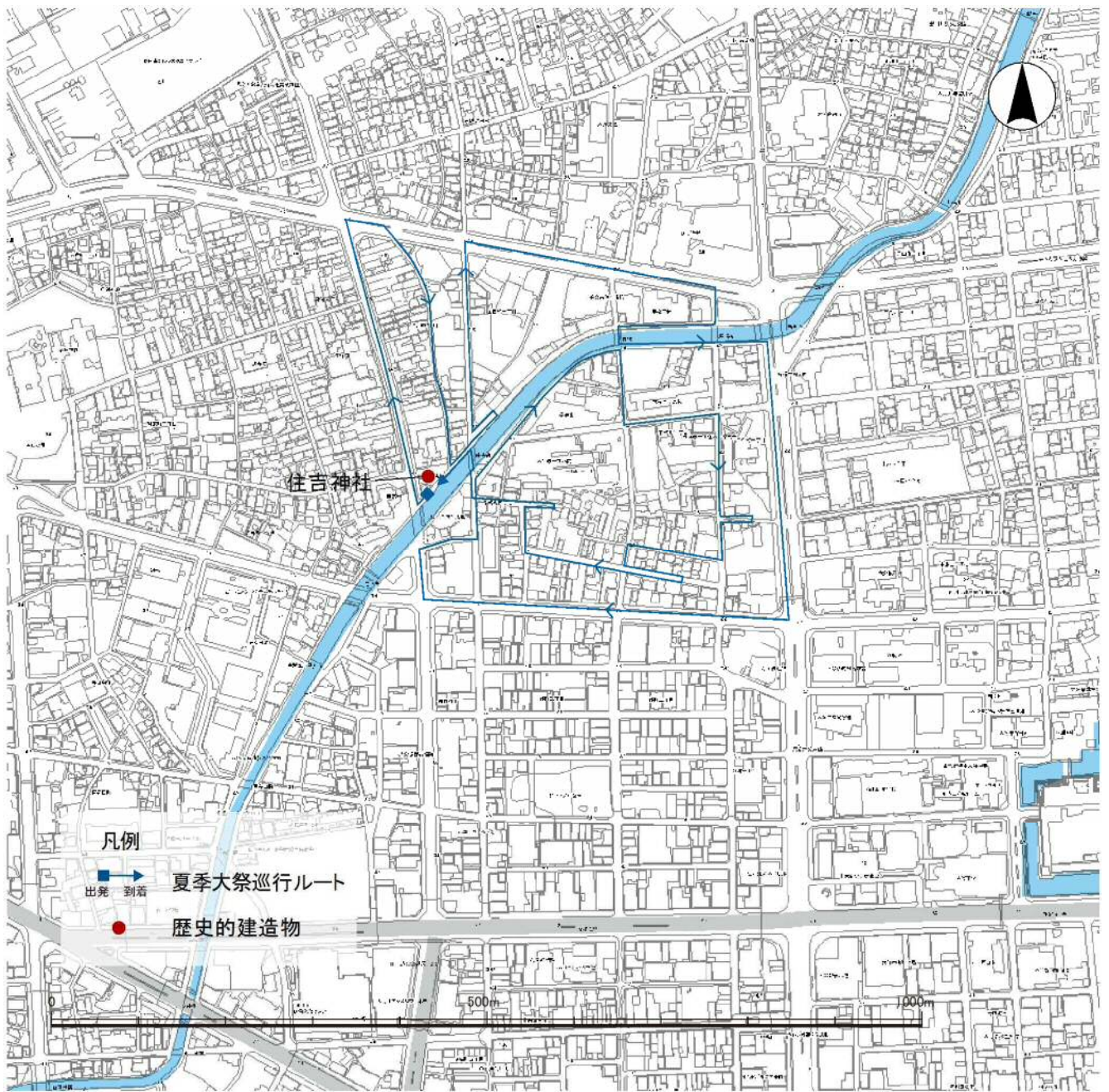
5) -3 活動

夏季祭礼(7月28日)

『府内藩記録』(正徳2年(1712))によると、祭礼日は旧暦6月28日とされており、現在の夏季祭礼日(月遅れの7月28日)に引き継がれている。現在では、神事ののち午後5時過ぎに神輿が出立する。「サヤッサ」の掛け声とともに、大分市街地北側の江戸時代の旧船頭町(現:住吉町)から戦国時代の港町である「沖ノ浜」があった勢家町や、千代町を神輿が巡幸し、午後7時頃に神社に還幸する。江戸時代の府内城下町北口にあたる「堀川口」付近の古い道を通り、海や港町に関わる祭りとして歴史的風致を形成している。



古い民家前での練り



住吉神社夏季祭礼範囲図（平成29年（2017））

6) 長浜神社の祭礼

6) -1 はじめに

長浜神社は、元禄11年(1698)の『豊府聞書』^{ほうふききがき}によれば、応永13年(1406)に塩九升に住んでいた荒巻氏が夢に現れた長浜明神のお告げによって創建したとされる。『府内古図』にも描かれているが、現在の境内地より北西舟入の入り口付近に位置していたと考えられている。慶長元年(1596)の大地震による津波のため社殿は流失し、一時、春日神社境内地内に社殿が建てられていたが、延宝9年(1681)に現在の場所に遷された。



『府内古図』に描かれた長浜神社

6) -2 建造物

長浜神社

明治37年(1904)刊行の『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』によれば明治13年(1880)に神殿改営とあり、この時に改修され、その後大正7年(1918)に改修または建て替えられたと考えられる。本殿は、一間社流造銅板葺。^{どうばんぶき}拝殿は入母屋造棧瓦葺、千鳥破風付で向拝に唐破風付で社殿新築の新聞記事より大正7年(1918)の建築と判断される。



長浜神社社殿

6) -3 活動

夏季祭礼

長浜神社夏季祭礼は、大分市内の夏祭りのなかで最も早い7月5・6・7日の3日間行われ、例年期間中に雨が降ることから「雨の長浜様」と呼ばれている。明治2年(1869)『旧藩神社明細帳』によれば祭礼日が旧暦6月6日となっており、月遅れの現在の祭礼日に引き継がれている。長浜神社の祭神は女性であるため、女性の信仰をあつめており、江戸時代におみかさんという女性がお参りしたおかげで病がなおったため、お礼に餅を奉納したことに由来する「おみか餅」が名物となっている。「おみか餅」は長さ60cmほどの「ネズミモチ」の枝先に赤と緑、黄色三色の餅をつけており、



おみか餅を作っている様子



おみか餅

しよくじょう
塩九升通商店街がはじめてとされ、かつては商店街の軒先に掛けて販売していたが、のちに神社により作られるようになったといわれる。昭和14年(1939)7月6日の『豊州新報』には「(中略)名物の「おみか餅」をはじめ玩具、飴屋、氷屋、夏の味覚をそそる果物屋などの露店がところ狭しに並んで(後略)」とあり、昭和15年(1940)7月6日の『豊州新報』には「(前略)神社の参道一帯には此のゆかりも美しい「おみか餅」を売る店が並ぶ(後略)」とある。



太鼓山車の巡行

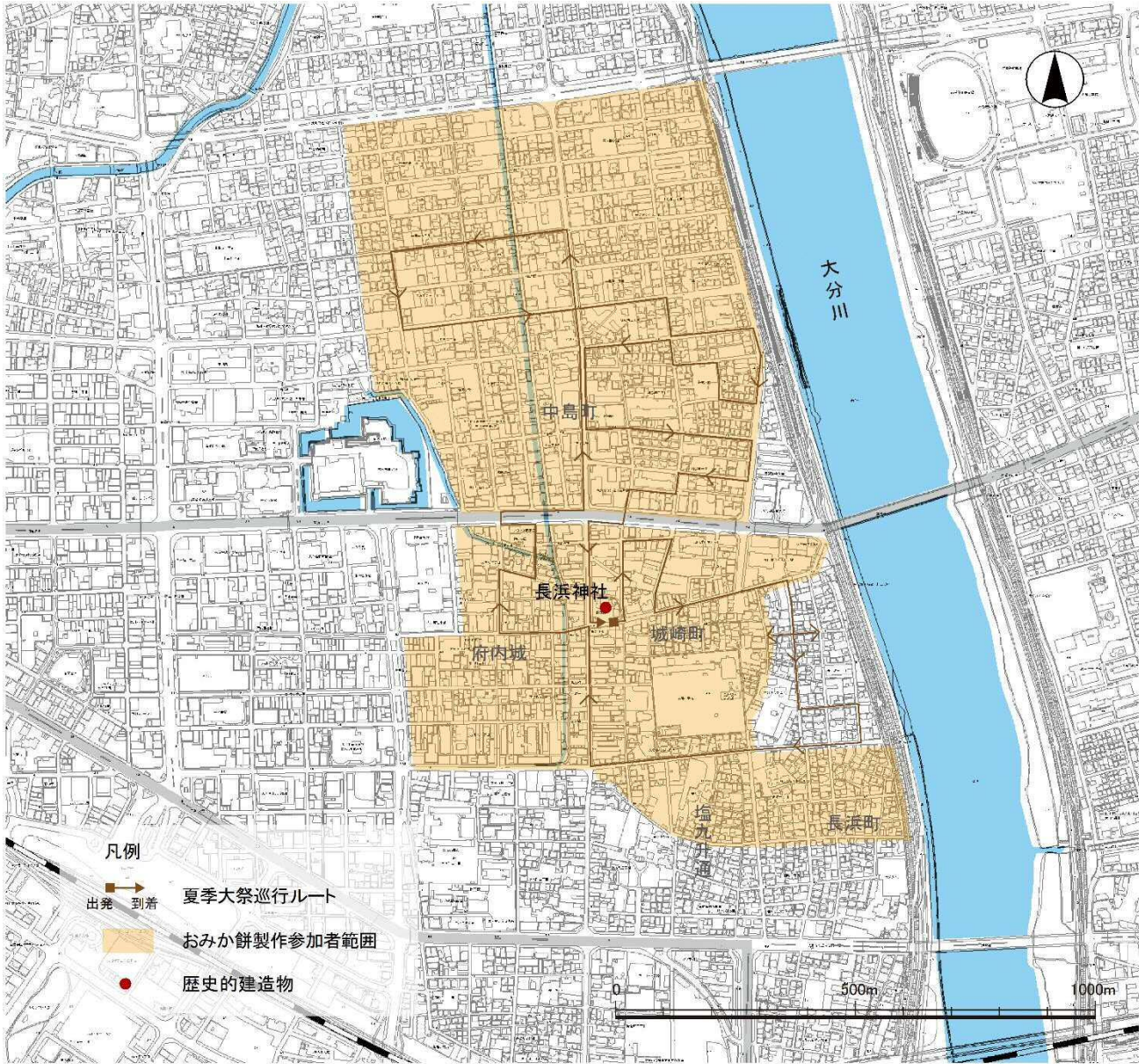
「おみか餅」作りは、祭礼のおよそ2週間前に作業を開始する。作業参加者は、氏子・塩九升通商店街関係者・長浜地区在住の児童であり、境内にシートを敷いて行われる。

餅は神社近くの製菓店より提供され、食紅により赤・黄・緑に着色された餅を切って「ネズミモチ」の枝先に刺す。「ネズミモチ」の枝は、塩九升通商店街にある花屋が宮崎県の業者に発注して用意しているが、近年入手が難しくなっている。

「おみか餅」完成後、宮司によりお祓いされ、祭礼期間中神社関係者が境内で販売している。

祭礼は7月6日が本祭で、神事ののち午後4時すぎに神輿が出立し、中世府内の町と江戸時代の府内城下町が重なる塩九升通や長浜町を巡り、府内城の東側城崎町、中島町まで広い範囲で神輿が巡幸する。神輿の前を「獅子」が歩き、無病息災を願う人々の頭をかむ。

大分市中心部最初の夏祭りであることから大勢の人出でにぎわいをみせている。



長浜神社夏季祭礼範囲図（平成29年（2017））

わかみややはちまんしゃ

7) 若宮八幡社の祭礼

7) -1 はじめに

若宮八幡社は、建久2年(1196)に豊後大友氏初代大友能直が入国の際、鎌倉の鶴岡八幡宮から勧請したと伝えられ、『府内古図』にもほぼ現位置の場所に描かれている。歴代大友氏の信仰が厚く大友義長は社殿再建を行い大友義鑑、宗麟も修理を行っており、祭礼の時には大友館より飾り馬を出し、神幸に参列したという。

明治14年(1881)に大分市の南新地(現:ふないアクアパーク)へ神社が移転し、さらに明治29年(1896)に大友神社建立の計画が持ち上がったことがきっかけとなり、境内にある遷座記念碑より大正10年(1921)に若宮八幡社が再び現在地に移転している。檜神社・金刀比羅神社・大友社も移設されている。檜神社と金刀比羅神社は同じ社殿であり、中に神輿が納められている。



『府内古図』に描かれた
若宮八幡社



若宮八幡社

7) -2 建造物

わかみややはちまんしゃ
若宮八幡社(建造物:鳥居、檜神社・金刀比羅神社)

花崗岩製の明神鳥居で銘文より大正10年(1921)の建立であり、境内地の東に位置している。

遷座記念碑より大正10年(1921)に現在地に移転し本殿・檜神社と金刀比羅神社が建てられた。檜神社と金刀比羅神社は同じ社殿であり、中に神輿が納められている。平成15年(2003)都市計画道路の整備に伴い本殿は境内に移築されており、一部以前の部材が用いられている。



若宮八幡社鳥居



檜神社・金刀比羅神社は同じ社殿

まんじゅこうしやうぜんじ きんもん
萬壽興聖禪寺・山門

萬壽興聖禪寺は、『大分県の近世社寺建築』(昭和62年(1987))によれば、鎌倉時代末期の徳治元年(1306)大友氏5代貞親^{さだちか}によって建立され、中世府内町で最大規模を誇る禅宗寺院であったが、16世紀末に焼失し江戸時代初めに竹中重義^{たけなかしげよし}の援助によって旧地よりも北側に移して現在の位置で再建された。山門は柱の下に巻きつけた銅板の飾りの銘文より文政2年(1819)に建築されたものである。



まんじゅこうしやうぜんじ
萬壽興聖禪寺山門

まんじゅこうしやうぜんじ
萬壽興聖禪寺・仏殿

仏殿は、入母屋造本瓦葺で『大分県の近世社寺建築』(昭和62年(1987))によれば、18世紀の建築である。内部に釈迦如来坐像を安置し、座禅のために使用されている。



仏殿

まんじゅこうしやうぜんじ きやうぞう りんぞう
萬壽興聖禪寺・経蔵(輪蔵)

経蔵は、宝形造瓦葺で『大分県の近世社寺建築』(昭和62年(1987))によれば、18世紀の建築である。内部には、八角形の輪蔵があり経本が納められている。



経蔵(輪蔵)

まんじゅこうしやうぜんじ かのん
萬壽興聖禪寺・観音堂

観音堂は、入母屋造本瓦葺で『大分県の近世社寺建築』(昭和62年(1987))によれば、18世紀の建築である。堂のまわりに縁が設けられている。



観音堂

おおいたもとまちせきぶつ
大分元町石仏【史跡】

豊後国ぶんごのくにの国府くにのふがあったと推定される上野台地うえのの東面に築造された磨崖仏まがいぶつで、11世紀後半～末頃の造立とみられる。東向きに10体以上の磨崖仏が彫られていたと考えられるが、現在最も良好に残っている薬師如来坐像やくしにょらいざざうは高さ約3mで、平等院びやうどういん鳳凰堂ほうおうどう阿弥陀如来像あみだにょらいざうを代表とする定朝様式の伝統をよく踏襲した姿に仕上げられている。磨崖仏でありながら、きめ細かな表面仕上げが行われ、木彫仏に通じる技法が用いられるなど、美術工芸的な高い価値をもっている。



大分元町石仏

7) -3 活動

夏季祭礼

若宮八幡社夏季祭礼は、大友社や櫛神社など若宮八幡社境内にある全ての神社の祭礼として7月9日に子供神輿巡幸、14日にはチキリン太鼓の巡幸と子供チキリン大会の開催、15日には神輿の巡幸が行われており、明治30年(1895)の『神社慣例』によれば祭礼日が旧暦6月14日・15日とあるので、月遅れの現在に引き継がれている。江戸時代には旧暦3月3日に「櫛形祭礼」が行われていたが、南新地くしかた(現:ふないアクアパーク)移転以降に夏祭りへと移り変わったと考えられる。「子供チキリン大会」はおよそ30年ほど前からはじまり、毎年6月末から若宮八幡社氏子の地区でチキリンの練習がはじまり、7月14日に大会を開催する。7月15日の本祭では午後1時に神輿が出立し、太鼓とチキリンがあとにつづき、中世府内の町である六坊町ろくぼうまち、元町もとまち(大分元町石仏)、上野町うえのまち、キリスト教会が所在したと考えられる顕徳町けんとくまちから江戸時代の府内城下町である府内町、萬壽興聖禅寺の前に立ち寄り、大手町にかけて広い範囲にわたって巡幸する。



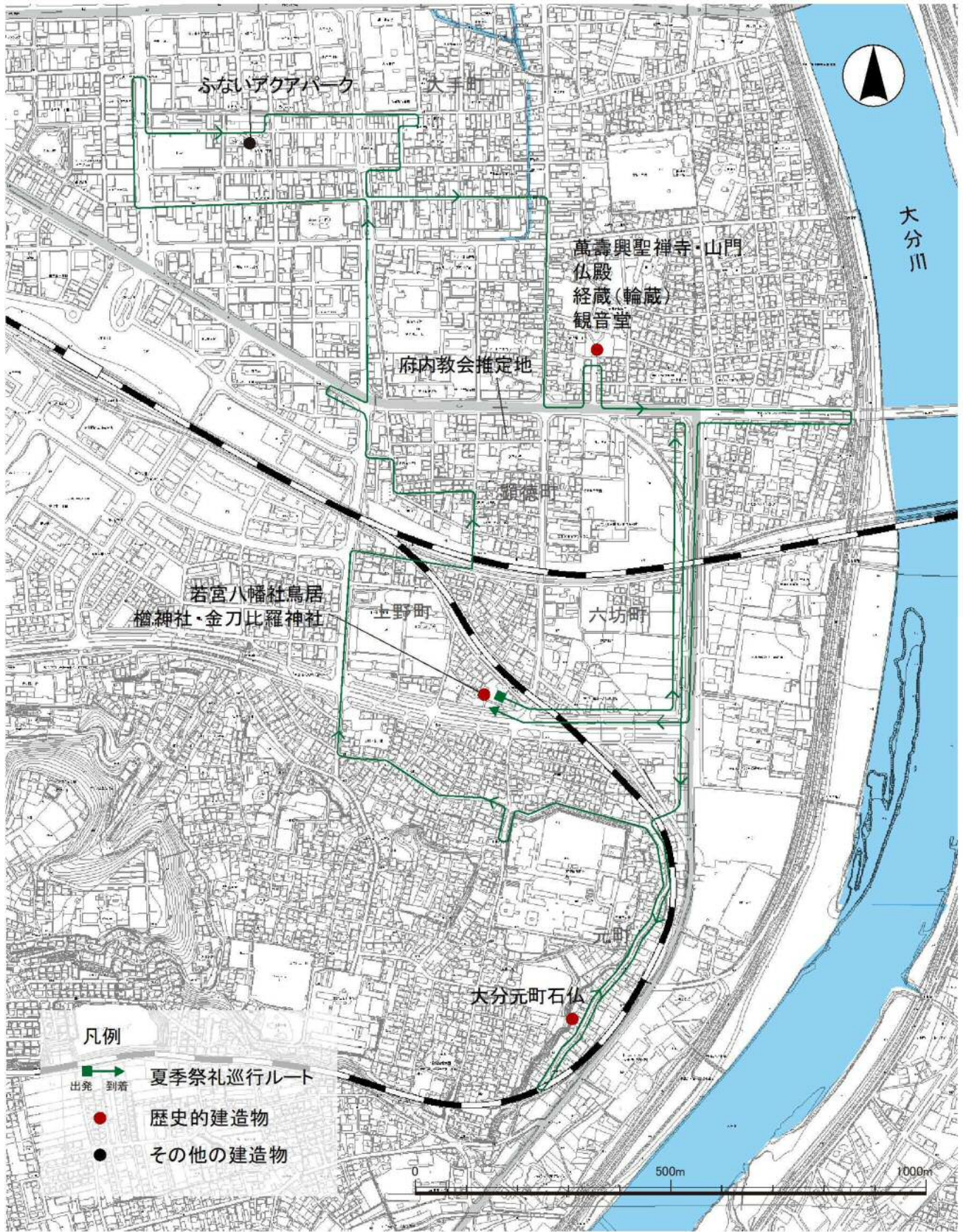
戦国時代の府内教会推定地付近を巡幸



「旧府内の町」の大通りを巡幸(六坊北町)



かつての境内地(現:ふないアクアパーク)で休憩



若宮八幡社夏季祭礼範囲図（平成29年（2017））

8) 松坂神社の祭礼

8) -1 はじめに

松坂神社は、江戸時代の古文書『豊府聞書』によると、柞原八幡宮より創建が古く「国八幡」と呼ばれており、隣接地である大分県立上野丘高等学校が「国衙跡」推定地であるため、国衙や国司との関係がうかがえる神社である。

8) -2 建造物

松坂神社

境内にある碑文には社殿改築を昭和12年(1937)に行ったとあるためこれが拝殿・本殿の修理と考えられ、それ以前の建築とみられる。本殿は一間社流造銅板葺で、拝殿は入母屋造棧瓦葺、千鳥破風付で向拝に唐破風が付く。

唐破風の瓦は、青海波模様で府内藩主大給松平氏の家紋である「釘抜き紋」が使用されている。



松坂神社

金剛宝戒寺大日堂

『大日本帝國大分県社寺名勝圖録』(明治37年(1904))に明治30年(1897)当時の様子が描かれている。

木造二層、入母屋造、本瓦葺、唐破風付の建造物で重要文化財「木造大日如来坐像」が安置されている。外観からは2階建に見えるが、内部は天井がなく、一室である。



金剛宝戒寺大日堂

8) -3 活動

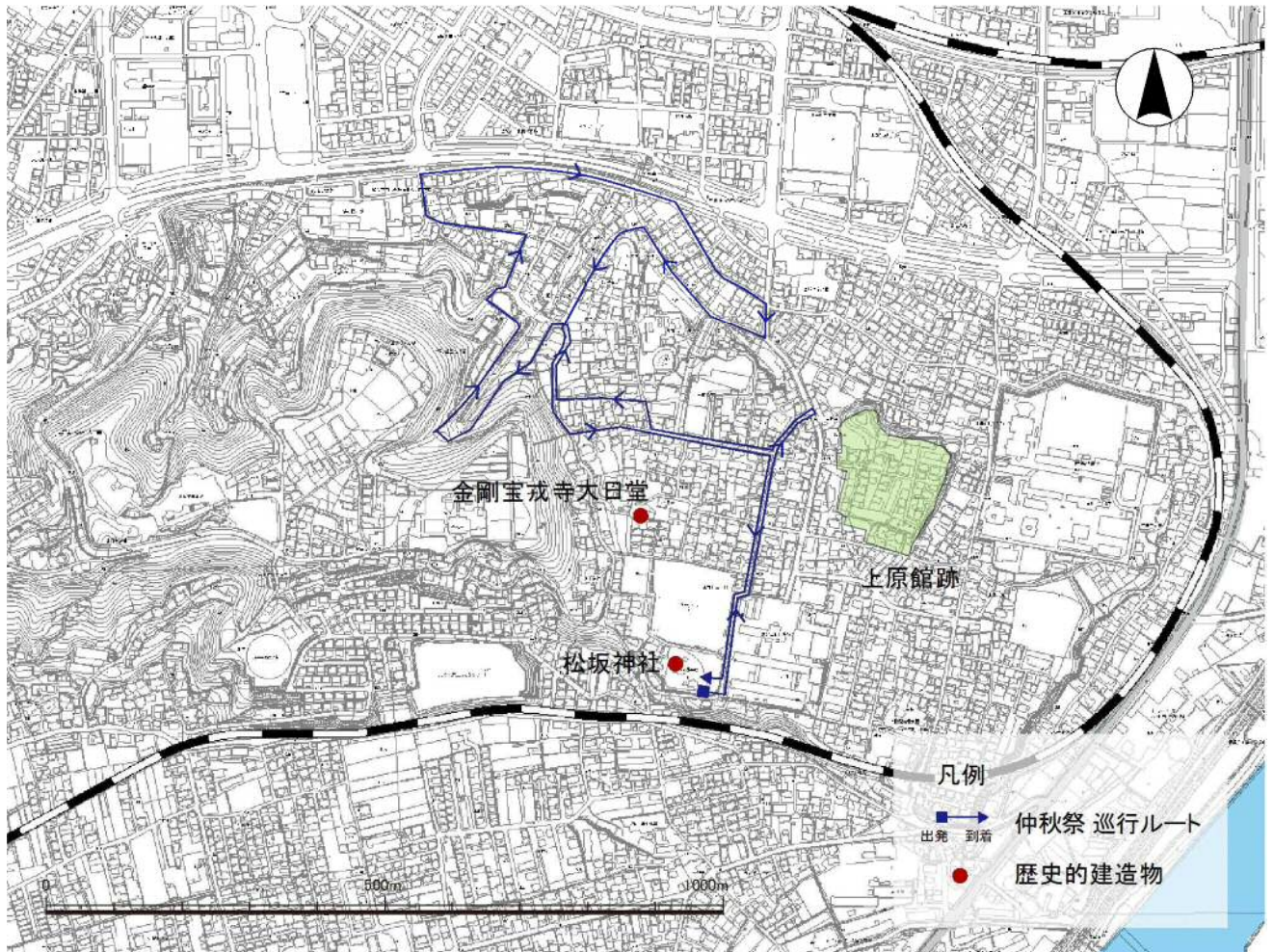
松坂神社の祭礼

『神社編集』(明治14年(1881))によれば、^{ゆすはらはちまんぐう}柞原八幡宮の祭礼である「夏越祭」「浜の市」の巡幸や還幸の際には松坂神社の御神体が浜の市に「おわたり」する。その途中、府内城下町「中ノ町」の^{たけうちしゃ}武内社(現在は無い)に立ち寄るならわしがあり、現在においても柞原八幡宮の「浜の市」が終了したあと、旧暦8月25日には御神体が松坂神社へ「還幸」する祭礼が引き継がれている。

現在では、9月23日に松坂神社仲秋祭があり、^{こんごうほうかいじ}金剛宝戒寺^{だいにちどう}大日堂の前や上原館跡の西側など上野丘地区を中心に、神輿が巡幸する。かつては大人が神輿を担いでいたが、現在は2基とも子供神輿となっている。



仲秋祭の子供神輿



松坂神社仲秋祭範囲図(平成29年(2017))

9) 弥栄神社の祭礼

9) -1 はじめに

弥栄神社は、言い伝えによると、豊後大友氏初代大友能直が京都祇園宮を勧請し創建されたとされる。中世には上の野台地南東端の字総社付近にあったが、江戸時代に現在地に移転したとされる。



神輿が拝殿に到着（古写真昭和20年代）

9) -2 建造物

本殿・拝殿

本殿は三間社流造銅板葺である。拝殿は入母屋造銅板葺、一間の向拝が付く。本殿、拝殿の間は下屋でつないでいる。『大分市史』(大正4年(1915))によれば本殿、拝殿を大正元年(1912)に大修繕をしたとあることからそれ以前の建物である。



本殿



拝殿

楼門

楼門は、『旧宮大工家文書』(明治23年(1890))に寛永2年(1625)に建築されたとあり、江戸時代後期に描かれた『松栄神社所蔵絵図』(市指定有形文化財)にも描かれている。入母屋造本瓦葺で内外面の1階に唐破風付きの庇がつく。



弥栄神社楼門

鳥居

鳥居は、青銅製の台輪鳥居で銘文はないが、江戸時代後期に描かれた『松栄神社所蔵絵図』(市指定有形文化財)に、弥栄神社ともに描かれていることから江戸時代後期には建てられていたことが分かる。青銅製の鳥居は大分市内でも珍しく絵図中の鳥居そばに「紫銅」と紹介されている。



鳥居

9) -3 活動

夏季祭礼

大友氏が治めていた頃は山車が府内の町を巡行する京都祇園会さながらのにぎわいが見られた。また、江戸時代にも「祇園会」が執り行われ、『豊府雑誌』(江戸時代)によれば「今は莊山一基、小山鉾一基のみ。…」とあり、現在も当時の山車の車輪が楼門に残されている。

現在は、夏季祭礼として7月上旬の日曜日に獅子と子供神輿が南大分地区を巡幸する。午前9時に神輿が出立し、神社からかつてお旅所であった「祇園川原」までつながる道を下っていき、旧府内の町につながる本町通りを巡幸する。その間、獅子は道沿いの人々の頭をかみ、無病息災を願う。現在は、国衛の鍵を意味する印鑰神社(大国社)で休憩した後、弥栄神社へ戻る。



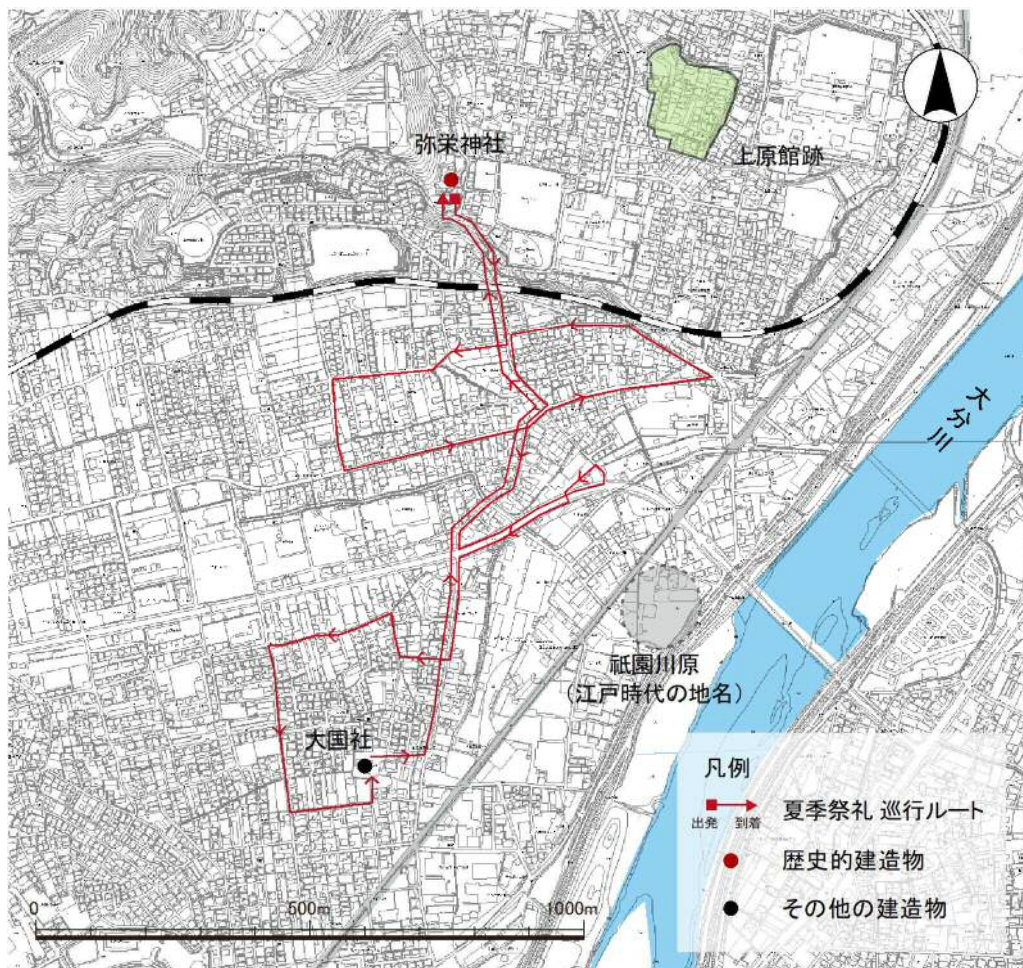
大国社



巡幸前の神事



獅子にかませる



弥栄神社夏季祭礼範囲図 (平成29年(2017))

10) 「お宮さん」 供養祭

10) -1 はじめに

府内城は、慶長2年(1597)福原直高^{ふくはらなおたか}によって築城が開始され、後に竹中重利^{たけなかしげとし}によって築城がつづけられ慶長7年(1602)天守を含む城の全容が完成した。

『府内藩年中行事』(文久3年(1863))によると、3月17日に「翌日18日に行われる御天守下弁天祭礼について必要な品を藩の「御台所」で受け取るよう福寿院に手紙をさしつかわせた」とあり、「御天守下弁天祭礼」として行われていたことが分かる。

府内城築城について「お宮さん」の伝説がある。「府内城築城の際、天守台の地盤が出水によって固定できず難工事となった。そこで人柱を立てることとなり領内のお宮という若い女性が犠牲となり、その後、地盤が安定し工事が完了した。城主はお宮の霊を慰めるため、天守台下に弁天祠を建て、命日である旧暦3月18日に藩主が船でお参りをした。」という。

この伝説は昭和7年(1932)発行の『増補 豊後傳説集』^{ぞうほ ぶんご でんせつしゅう}にある「宮が城」の話が文献上の初見であり、この頃から「お宮さん」供養祭となったと考えられる。

10) -2 建造物

お宮祠

お宮祠は、府内城の城絵図のうち、寛文7年(1667)以降に成立したとされる『府内絵図』には天守台西側に付加された石垣が描かれ「弁財天」との注記があるが、これがお宮さん供養祭が行われている場所の現況と酷似しており、祠の前に凝灰岩製の鳥居の柱などがあり、かつて信仰のための石造物があったことがうかがえる。また、周辺の石垣は、17世紀後半には築造されていたと考えられる。



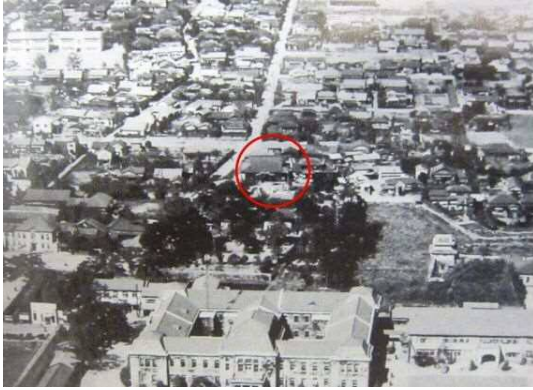
江戸時代の城絵図にも描かれた
天守台横の弁財天



人質櫓（左上）と天守台下にある石垣とお宮祠（赤丸）

ふくじゅいん
福寿院

福寿院は、府内城三之丸の東部、現在の県庁新庁舎の位置に所在したが、明治3年(1870)に現在の場所に移転した。本堂は入母屋造^{どうぼんぶき}棧瓦葺^{こうはい}で、唐破風銅板葺の向拝が設けられている。戦災後を含め度々改修されたとみられるが、写真より昭和29年(1954)以前の建築であることが分かる。



古写真にある福寿院



現在の福寿院
ふくじゅいん

ふないじょうひとぢちやぐら
府内城人質櫓 【県指定史跡】

府内城人質櫓は、文久元年(1861)『府内藩記録』により文久元年(1861)の建築である。入母屋造二重櫓本瓦葺で、正保元年(1644)の『豊後府内城之絵図』に描かれている寸法と同じであることから、建築当初の姿を留めていると考えられる。お宮さん供養祭が行われる府内城跡にある。



人質櫓

ふないじょうしゅうもんやぐら
府内城宗門櫓 【県指定史跡】

府内城宗門櫓は、安政6年(1859)の『府内藩記録』により安政6年(1859)の建築である。入母屋造本瓦葺で穴倉付の平櫓である。表からは1層に見えるが、裏から見ると2層になっている。正保元年(1644)の『豊後府内城之絵図』に描かれている寸法と同じであることから建築当初の姿を留めていると考えられる。お宮さん供養祭が行われる府内城跡にある。



宗門櫓(修理中)
(平成30年(2018)2月撮影)

10) -3 活動

お宮さん供養祭

お宮さん供養祭は、毎年3月18日に執り行われる。福寿院ふくじゅいんにおいて、檀家だんかを中心に祭礼に使用する供物(ニンジン、キャベツ、米)の準備をする。

福寿院の僧侶と檀家ふないじょうろうかばしは、府内城廊下橋(平成8年(1996))を渡り、府内城宗門櫓ふないじょうしゅうもんやぐらを左手に臨みながら、供養祭の行われる府内城天守台の石垣近くにあるお宮祠へと向う。

お宮祠の前に祭壇が設けられ花と精進料理が供えられる。大分県内の檀家などおよそ30名の人々が参列しお宮祠から府内城人質櫓下ふないじょうひとぢやぐらにかけて集まる。午前10時に福寿院の住職他2名の僧侶による読経どきょうにより供養がはじまる。読経の中、焼香盆及びニンジン、キャベツを刻んだ盆しょうこうぼんが参加者の間を巡る。刻んだ野菜しきみに榊しきみ*で水をかけ、無縁仏に水や食物を施し供養する「施餓鬼供養せがきくよう」が同時に行われる。

※ 榊しきみ: 枝や樹皮からお線香の様な独特の香りが特徴のもくれん科の常緑樹のこと。葬儀の際やお墓にお供えされる。



祭礼に使用する品物



府内城廊下橋を渡る僧侶



天守台下に設けられた祭壇



府内城廊下橋の全景



福寿院による読経



僧侶と供養祭に集まる檀家
(赤丸はお宮祠)
(左上は人質櫓)

(2) -3 まとめ

これまで見てきたように、新旧府内の範囲では、祭礼などの活動を担う住民を伴い、中世から近世・近代と町の中心が移動するといった歴史的特徴がみられる。

また、鎌倉時代からおよそ400年にわたり豊後国を治めてきた大友氏を顕彰する活動は、時代の流れの中で形を変えながらつづけられてきた。

さらに、新旧府内の町には、中世以来の伝統をもつ神社が多く残っており、それらに関わる祭礼は、時代とともに、「かたち」を変えながら地域と住民の中で根付き、現在も残る中世や近世に整備された街路や街区を祭礼の場として受け継がれている。

多くの祭礼は、町場の祭りとして夏季に行われており、チキリンの練習の鉦かねの音は夏の訪れを告げる風物詩となっている。6月後半から7月末までの1ヶ月間は、町のあちこちで鉦や太鼓の音が聞こえ、祭礼を知らせる職のぼりが見られる。大友氏と大友宗麟の功績を顕彰する活動、祭礼を担う人々の活動とそれを行う場が、当地域の歴史的風致を形成している。



新旧府内における歴史的風致の範囲